



鉄の歴史

生活のなかの鉄器文化—日本とその周辺を中心にして—

朝岡康二

国立歴史民俗博物館 民俗研究部教授

Kouji Asaoka

Iron Culture in Daily Life : especially in Japan and Asia

人類が鉄器を使用するようになってから、すでに長い時間が経過した。その間に鉄を生産し加工する技術も、それを利用する範囲も大いに変化・拡大・進展し、その結果、今日みられる高度な技術文明を作り上げることができた。この技術的・産業的な発展はまことに驚異的であったから、技術史はその道筋を明らかにすることを主要な目的とし、そのために「発達」という視点を特に重視してきたのであろう。しかし、ここで取り扱おうとする事象は、このような技術史的な観点に直接に繋がるものではない。

筆者はこれまで、前近代的生活、ないしはそれをなんらかの形で継承すると考えられる具体的な民衆生活のなかで、鉄が受け持ち、果たした役割を知りたいと考えながら、調査・研究をおこなってきた者である。

したがって、取り扱う対象は日常生活に密着したごく限られた狭い部分に止まり、そのなかで色々の変容を伴いながらも、ある種の慣習を作ってきた使用者と製作者の関係、あるいはこの慣習を生み出したと考えられる技術的な諸要素、材料性質・器物の形態・様式の地域的分布・その使用方法、などを検討することに関心の中心をおいてきたのである。

確かに近代における鉄の役割は絶対的なものであったし、その生産力がいわゆる国力を象徴した時代もあったが、そのことと前近代社会とそれを受け継いだ民衆の日常生活における鉄の役割は、相当に異なる側面を持っていたと考えられる。伝承的な生活における鉄の役割を近代的な観点に依拠する一方的な立場からのみ理解するわけにいかない、と筆者が考えるのも、このことに関わっている。しかも、民衆の日常生活という面からいえば、近代の鉄は大きな利便をもたらした、その生活基盤を根底から変化させる力を持っていたが、にもかかわらず、かならずしも有意義なものばかりをもたらした、とはいえないと思われる。

少なくとも日本では、近代の鉄は伝承的・慣習的世界と

まったく断絶したところから、突然に圧倒的な力を持つ異様なものとして登場し、以来今日まで、生活に密着した日常的素材として受け入れられたというよりも、そこから少し離れたところに、超越的な文明として君臨し続けてきたといえるであろう。そして、日本の民衆の近代とは、この超越的な素材と日常生活との非連続をいかに乗り越えるかという、絶え間のない葛藤の過程を示していると思われる。

もちろん、このことは単に鉄をめぐる問題に限るものではなく、広く日本の近代全般に関わる問題でもあろうが、この人々の葛藤のもつ意味を知ろうとするならば、その前提として、伝承的な慣習の内実を、個別的、具体的に明らかにして、その上で近代における変容を知る必要があると思われる。

以下に述べることは、日常生活から遠く離れた鉄生産(製鉄・精錬)における伝承的技術と近代技術の関係史、あるいは、そこから生じた社会経済史的な構造分析などに及ぶものではない。というよりも、意図的に材料生産の諸問題から離れて、すでにどこかで作られ、現に存在する鉄が生活のなかでどのように利用されてきたか、という観点から始めて、その行く末を具体的にたどり、鉄に対する人々の意識・感覚の発掘を試みようとするものである。



鉄材料の再生利用をめぐる

周知の通り鉄はひとたび鉄材料に作り上げられると、以後は、比較的に簡単に反復再生できる性質を持っている。もちろん、反復使用できるものはなにも鉄に限るわけではなく、むしろ伝承的な材料であればなんでも、ある程度繰り返して使用するものであったといっている。それが材料の歴史の一般的な特徴なのである。

たとえば、つい少し前まで、解体した屋敷の古材木を、農家の軒先に積み上げて保存しているのをよく見かけた

し、町では古建具を回収して売っている建具屋が営業していたものである。このように木材も反復利用する材料のひとつであった。

衣料についてもまったく同様である。古着は解きほいて仕立て直し、継ぎあてをほどこし、刺し子にして用いるなど、布生活には各種の再生方法がとれない、それが女の文化の一面を作っていたといつてよい。そして、近世から明治時代を通して、都市で発生する古木綿は、遠隔地に多量に移出されて裂織りの材料となり、これによって東北地方の衣生活は大きな変貌を遂げた、といわれるほどである。このために大阪の古手間屋が重要な役割を果たしていたことは、すでに経済史研究においてよく知られている事実である。

この他にも少し調べてみると、過去には反復利用の例が、日常の細かな部分に、たくさんあったことが分かる。江戸の町には傘の骨・古草履・竈の灰まで買い集める者たちがいたというほどである。

このような観点からみれば、前近代の庶民の日常生活はかなりの部分を修理・再生の循環に依存していた、と考えることができる。その場合に、古物回収やその再生の仕組みは今日想像するよりもはるかに重要なものであったはずだから、そこになんらかの社会的な組織がともなっていたと考えなければならない。この点はまだ十分に調べたわけではないが、城下町のような人口密集地に古物回収を生業とする人々が集住する街区が設けられ、なかには大きな特権を与えられている場合があったことが分かっている。

そして、こうした再生材料のなかでも、古鉄の回収はもっとも重要なもののひとつであったと考えられる。

青森南部・東通の沿岸地域は内陸部に移出する製塩のさかんなところであったが、ここで用いた塩釜は、鉄板を繋ぎ合わせて作った大きな平板であった。そして、これを作る材料として難破した船舶の鉄を積極的に回収して用いていたというのである。旧時代の海事法では積荷は勝手に処分できないが、難破船そのものは「寄り物」の一種と見なしていたようで、沿岸の人々が処分出来たらしいのである。佐渡にも似たような話があり、実際、維新の際に難破した佐竹藩の廃船を引き上げて、この時代に需要の大きかった千歯扱き（脱穀器）の鉄穂の製造に利用しようとした記録も残っている（この場合は相応の金額で払下げている）。

つぎに外国での体験も少し付け加えておこう。インドネシアの首都ジャカルタでの話がある（図1、図2）。

ジャカルタからさして遠くない西ジャワ山地には、今だに外界から隔絶した生活を営んでいる少数民族がいて、自分たちの世界にこもって自給自足の暮らしを続けている。ところが、この人々も時には山を下りて、ジャカルタの町

なかに出て来ることもあるという。

聞くとところによると、彼らは町に来て、町の人々とはまったく会話をせず、ただ黙々と歩き回り道端に落ちている古鉄を拾い集めて帰っていくのだという。わざわざ古鉄を集めるためだけに、ジャカルタの町に出てくるというわけである。山の居住地には鍛冶仕事に習熟した専門の者がいて、町で拾い集めた古鉄を用いてクリス（短剣）などの刃物に鍛え上げているという。彼らにとっての鉄とは、奥山で拾い集める木の実と同じような存在で、町なかで採集するものだったのである。

こんな話をしていると、タンザニアでの生活経験の長い人が、「アフリカでは缶詰の缶ですら落ちていない。捨てればたちまち回収されてしまう」というのである。

そして、当然ながら、こうした回収を効率的に行うために回収組織や回収業者が生まれることになる。

江戸の町では、古鉄と飴を交換する回収業として、いわゆる「とりかえべー」が知られているが、このような業態は近世の江戸に限って存在した特別のものではない。このことは、まだ人々の記憶に残る戦後の回収業を思い出せば、それだけで十分であろう。

筆者は、これに関してかつて沖縄で少しばかり聞き取り

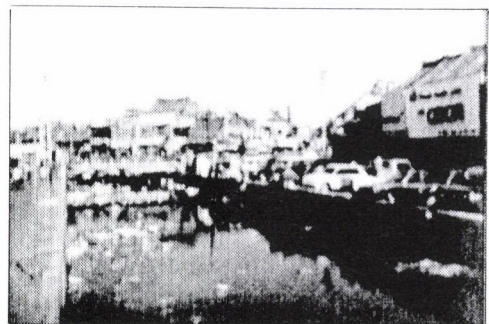


図1

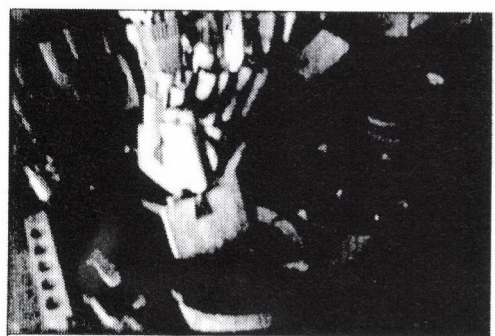


図2

ジャカルタのコタ（旧市街）

コタの旧漁港近くのイカン・パサール（原意は魚市場）は金物・鉄器商いの場となっている。もとは漁船や漁具を扱うところであったが、現在はありとあらゆる金物・鉄器をあつかい、古ボルト一本から売っている。都市はどこも金物・鉄器の集中するところであるから、そこで回収された廃鉄器が、材料鉄となって周辺地域に流通していく。西ジャワのスカブミ郊外の鉄器産地では、こうした廃鉄器を刃物などに再生して、もう一度ジャカルタに売り返していた。

調査をおこなったことがある。それによると、沖縄（特に本島とその周辺）では、戦後に古鉄の回収が徹底的に行われたことによって、戦争の生々しい傷痕をしめす兵器の残骸はほとんど姿を消していったのである（実はこの回収業が隆盛を極めたのは、次の戦争である朝鮮動乱の特需に関わるものでもあったが）。

また、その一方で、古鉄回収の状況はさかのぼって中世の世相を描いた絵巻のなかにも伺うことができる。絵巻のなかには焼け落ちた寺院の跡で、高下駄を履いて、まだ熱い灰のなかから古釘を拾っている人々が、生々しく描かれているのである。彼らは集めた古釘を売って、なにがしかの小遣いにしたに違いないが、灰がさめるのを待っている誰かに先にとられてしまう。仕方がないから高下駄を履いて、熱い灰のなかで争って探したのである。火事跡の古釘集めは、絵巻になるほどであるから、よく知られた日常的なものであったと考えてよい。すなわち、当時、すでに古鉄の回収・流通の仕組みが生まれていたのではないかと考えられる。そして、このことは考古学的な知見からも傍証できるそうである。各種の遺跡の発掘現場において、まれにしか鉄製品が出土しないために、考古学者は、「鉄はこまめに回収されていたに違いない」と考えているのである。

このように、古鉄の回収は、すでにインドネシアの例で示したように、日本にもあったが、日本に限ったことではなかった。というよりも、鉄を使用する地域であるならば、世界のどこでも行われていたごく普遍的な活動である、といった方がよいであろう。

この点について、韓国でも若干の聞き取り調査をおこなったことがあるが、ここでも最近まで日常的に古鉄の回収がおこなわれていたという。

今でもちょっとした町に出かけると、回収業者（今では新聞紙や古着を集めている方が多い）が、大きな鉄をチョキチョキ鳴らしながら、リヤカーをひいて路地をふれ歩いている姿に出会う。今では回収に来たことを知らせるために鉄を鳴らしているが、以前はそうではなかったという。韓国でも「とりかえべー」と同じように「古鉄と飴」の交換をおこなっていた、というのである。現在は合図のための鉄も、もとは紐状の飴を切るのに用いたものなのである。鉄の音が聞こえてくると、農家の嫁は、貯えておいた古鉄をこっそり子供に持たせて、おやつ代わりの飴に替えさせたという。

中国でも、浙江省・寧波近郊の農村調査をおこなった時に、同様の話を聞くことができた。民国時代には、古鉄を求めて村々を回って歩く人たちがたくさんいた、というのである。そして、まことに不思議なことであるが、ここで

も「古鉄と飴」を交換するものであった。この地方の飴は大きな円盤形で、放射状に小刀で切り出すものであったという。いずれにしても、ちり紙交換の仕組みはそれなりの古い歴史を持っていた、ということになるであろう。

以上のように、鉄はどこでも常に回収・再生しつつ使用してきたものである。そこで次に、その具体的な過程はどんなものであったか、それを可能にした諸条件とはなにか、といった点を少し述べることにしたい。

2 使いおろしと修理・再生

以下では、鉄器がどのように使いおろされ、修理・再生されてきたかについて、日本の例を中心に紹介することにした。実際には、鉄材料の一生は置かれた条件によって多様な過程をたどり、それぞれ興味深い話がたくさんあるが、紙面に限りがあるからごく部分的な紹介に終わらざるおえない。

一般に鉄材料は、材料の持つ性質から「軟鉄」「鋼鉄」「銑鉄」の3種類に分類され、これに基づいて使い分けられているが、だからといって、この区分は固定的なものではない。そこが面白いところであるが、ここでは「銑鉄」を中心に取り上げることにしたい。

現代技術の観点からみれば、一言に「銑鉄」といってもそれは総称で、さらに細かく区分されるが、伝承的な技術においては単に「鑄造に適した鉄のこと」と理解しておけばよい。そして、一般にはこれを「ずく」と称していた。日本では（中国では必ずしもそうではなかったが）、在来の「ずく」を用いた鑄造製品はほとんど白銑化したから、事後の機械的な加工がはなはだ困難であった。その結果、製品は鑄放しで用いるものでなければならず、そのために鍋・釜あるいは牛に牽かせる犁先など、非常に限定したものだけが作られた。だから、鑄物師といえば釣鐘・鰐口のような青銅の大形製品を扱い、鍋・釜・犁先を量産する業態を指していたのである。

白銑化した鑄物は落とすと割れやすいといった欠点もあるが、同時に腐食しにくいという利点も持っており、この点で鍋・釜にはよく適していた。金気が出にくく、耐久性が高いからである。

南アジアから中国西部の高地にかけては、現在も青銅や鍛銅の鍋あるいは土鍋を用いている地域が広くあるが、それはこの種の鉄鑄造技術が普及しなかったからである。インド亜大陸の鉄製鍋は鍛造製品である。そのために、鉄鍋は炒ったり、炒めたり、揚げたりするには向いているが、炊いたり、煮たりするにはあまり適さないのである。

白銑化した鉄器が丈夫である、とはいっても、長い年月

にわたって使い続けるといずれ鍋底は薄くなり、弱い部分に穴があく。

そこで鋳掛屋の出番になる。鋳掛屋とは、修理道具を天秤棒で担いで村々を回り歩き、鍋・釜の底を修理して歩く人々のことであった。穴のあいた鍋底の裏に粘土を張って乾燥させたうえで、小さな坩堝で溶かした少しばかりの鉄（時には青銅）を破れた穴に流込んで、その上から濡れ雑巾などで押さえる。以前は民具調査のおりなどにこうして何箇所も直した鍋・湯釜を、よく見かけたものである。

しかし、鍋底がさらに薄くなると、もう鋳掛けはできなくなり廃品にならざるおえない。こうして鍋・釜の一生は終わるのであるが、それではこの廃鍋釜はどのように始末されたのであろうか。たとえば、底の抜けた鍋は代用火鉢として用いる場合があった。外側で火を焚くならば内側で焚いてもよい、というわけで、割れた茶碗が石鹼入れになるのと同じような話である。こうした二次的な利用には色々なものがあるが、ここでは省略する。いずれにしても、最終的には材料に還元せざるおえないのである。

近世の古鍋釜の材料還元については、部分的ではあるが、鋳物師の文献のなかになんらかの記述をみることができる。

そのひとつの例は、新品と交換する形式で回収される場合である。

たとえば、岐阜城下の鍋屋町には、歳末に古鍋釜をぶら下げた人々が、新品と交換するために長い行列をつくるものであった、という。以前に三河・碧南の鋳物師資料をとおして、このような新旧交換を基本にした鍋釜の購入方法は近世後半までごく一般的な方法であって、その遺制は少なくとも天保改革あたりまでは有効であったと考えられることを論じたが、その根拠のひとつに、この交換には基準となる「単位」があった点をあげることができる。

鍋釜の大きさを表す方法には2通りある。

ひとつは、使用者側から生じたと考えられる「入れ目」を基準にした表示である。たとえば、一升鍋・五合炊き・三升釜などいうもので、明治時代の金物屋の価格表はこれを中心に記載しており、近年まで引き続き用いてきた表現方法である（もう少し詳しくは、入れ目が一升の場合と一升の米が炊ける場合とは異なるが、その問題はここでは措くとして）。
 このような「入れ目」による区分に対して、もうひとつは「目方」による区分であって、両者が併存する傾向が伺える点が鉄器のひとつの特徴であるといえる。壺・瓶のような焼きもの、桶樽のような結いもの、箆・長持のような組みものなど他の容器類の多くは、通常は目方で表すことはないのである。

一方、包丁のような打刃物は長さを基準にして、五寸包

丁、七寸包丁などという。しかし、これは店で出来合いを購入する場合に用いる表現方法であると考えてよく、鍛冶屋に注文する場合には、目方で頼むのが普通のことであった。その例は、目方が使用に際して重要な意味を持つ鋏先・鉋・斧などに今日も残っており、二百匁の鉋、二百三十匁の鋏先、といった注文方法をとるのである。

目方注文の場合、近年は仕上がり製品の目方を指すことが多いが、本来は使用する材料の目方であったと考えられる。なぜならば、以前は材料鉄は鍛冶屋が用意するのではなく、依頼主の持ってきた鉄を加工するものであり、加工賃の基準を材料の目方に求めたからである。

この点をもう少し付け加えておこう。近年、ネパールの調査に従事してきたが、そこでも「加工賃の基準」としての「目方」が生きていたからである（図3、図4）。

ある村の鍛冶屋は、加工にともなう目減り分を、常々実際よりもはるかに大きく吹聴していた。そして、材料込みで注文（鍛冶屋持ちの鉄を使う）を受ける場合に、出来た製品は注文の目方よりも相当に軽く仕上げて、その差を目減り分であると主張するのである。しかし実際には目減りしたのでなく、当初から注文の目方よりも軽い材料を用いて、その分を儲けとしてしまうのである。この場合に「入念に手間をかけて作ったから、その分だけ軽くなった」と



図3 ネパールの村の鍛冶屋が自動車の板バネから作った鎌を修理し、焼きの入れ直しをおこなっている。



図4 ドラム缶を開いて鉄板に戻した材料を用いて、鉄鍋を作っている。

ネパールでは村々に鍛冶屋の集住するところがあり、そこで摩耗した鋏・鎌の修理をおこなっている。その材料はすべて廃鉄器で、インドから輸入される鉄道材料・自動車の廃部品・ドラム缶などである。

いう理屈が存在するのである。

一方、注文する人もこうした事情は薄々知っているから、出来る限り自分で入手した鉄を持参するものである。使い古した刃物を別のものに仕立直して欲しい、といった注文もあるが、バザールに出たときに買った鉄を持ってくることもある。筆者が注文したクルパ（大鎌）は、注文した目方の七割以下になっていた。我々は秤を持っていたから、計測して「こんなに減る訳がない」と抗議したが、鍛冶屋は一向に動じなかった。

日本では鍋釜の場合に、目方による単位を「枚」で表す。たとえば「一升釜は一枚半」などといい、この「枚」が目方を示しているのである。

沖縄では、製糖に用いたり、家庭で唐芋を蒸かす大鍋を「サンメーナービ」「シンメーナービ」というが、これに漢字をあてると「三枚鍋」「四枚鍋」という表記になる。

現在では、この「三枚」「四枚」をなんとなく「入れ目」の単位であろう、と理解している人が多いが、もとは本土と同じ目方の単位だったのである。そして、この「入れ目」と「枚」との関係は、当然に鍋・釜の器形や肉厚によって異ってくるから、地域によって、あるいは鋳物師によって相当のばらつきが生じ、換算率が異なるものであった。

また、「枚」が示す目方の単位自体も地域や時代による変化があったようで、いくつかの記録を集めて比較をしてみたが、あまりにばらつきが大きくて統一的な基準は見出せなかった。

しかし、この「枚」が新旧交換の基準になっていたことは間違いない。一定の目方を「1枚」と決めて、新釜1枚分と古釜1枚分を交換する仕組みを基本として、それに目減り分を加えて、加工賃ならびに燃料代を上乗せするようになっていたのである。三河・碧南の鋳物師資料には、その方法を書き上げて藩に差し出した下書きが残っており、詳細に換算方法が記述されている。

こうした新旧交換の背景には、先のネパールの鍛冶屋の場合と同じく、モノの加工に従事するのが職人（この場合には鋳物師）の本分であって、鉄材料の調達に依頼人がおこなうもの、とする慣行的感覚があった、と推測される。そして、より重要なことは、こうした新旧交換の仕組みが、廃鉄器の再生利用を貫徹させるとともに、鋳物師が各地に広く分散居住していくことを可能にしたと考えられることである。かならずしも新鉄供給のネットワークの拡大に依存するものではなかったということである。

さて、こうした古鍋釜の再生利用をとおして、鋳物師が強力な経済力を得た例をひとつ挙げておこう。

ひとつは能登・仲居の塩釜を作った鋳物師の場合である。仲居鋳物師は中世以来この地で塩釜の製造に従事してきた

が、藩の経済政策に関わるいくつかの経緯を経て、塩土（製塩従業者）に塩釜を貸し付けて利をうる、いわゆる「貸釜慣行」を生み出した。塩釜は消耗が激しいものであるが、大形であるから入手が容易ではなく、そのために年期を限って釜を貸し付けて（新旧・大小によって貸賃が決まっていた）、その貸料は塩で回収する、という方法であった。

同様に、高岡の鋳物師は周辺の農家に一年単位で鍋・釜を貸し付けて、ここから上がる米を禄高の一種と考えて「鍋高〇〇石」と称するほどであったという。これに類似する慣行は鋤先・鋤先のような鍛造鉄器にもみることができるが、それは省略しよう。

ここでもう一度指摘しておきたいことは、個別の経緯には色々あるとしても、基本的には、依頼者が入手した鉄を加工することが職人（鋳物師・鍛冶屋）の仕事であったこと、その鉄は古鉄であることが少なくなかったという点である。このことは、鉄とその加工技術の世界的な伝播が、なにによって支えられてきたのかをよく表現していると思われる。

最後に、以上のように古鍋釜が鋳物師に還流して、新たに新鍋釜に再生される以外に、鍛冶材料として有効に利用されていたことにも触れておこう。これにも様々の事例があるが、例えば、王府時代の沖縄本島は砂糖がもっとも重要な大和向けの移出産品であったから、このための「サーターナービ（砂糖鍋）」は必要不可欠の生産財であった。しかし、国内に生産技術がなかったから、薩摩の琉球館経由で、大阪から大量に移入していたのである。そして、移入された大量の砂糖鍋が摩耗・破損しても、これを再び鍋に作り直すことはできなかった。

筆者はこの古鍋の行方に関心を持って調べてみたが、一部は薩摩に還流して薩摩鋳物師の材料とされた可能性もある。しかし、その多くは沖縄のなかで鍛冶材料として利用されたと考えられ、それは考古学的にも文献的にも実証できるのである。そして、それがこの地域に独特の鍛冶技術を成立させていたことも推測できる。詳しくは省略せざるおえないが、こうして島に蓄積した古鍋釜が島の鉄器文化を進展させる役割を担ったのである。

東アジアの鉄鑄造技術を保持する地域とその周辺には、銑鉄（主として古鍋釜）を材料として鍛冶技術に特色を与えるものが少なくないが、紙面も尽きたので、この点は改めて別に紹介することにしたい。

(1997年11月4日受付)